

第 14 回 2025 年デフリンピック大会に係る大会準備連携会議
(議事概要)

1 開催日時

令和 8 年 1 月 23 日 (金曜日) 11 時 00 分から 12 時 00 分まで

2 開催場所

東京都庁第一本庁舎 42 階北塔 特別会議室 B

3 構成員等

○構成員

一般財団法人全日本ろうあ連盟	久松 三二	常任理事・事務局長
東京都	渡邊 知秀	スポーツ推進本部長
スポーツ庁	小川 哲史	参事官 (国際担当)
公益財団法人日本オリンピック委員会	星 香里	常務理事
公益財団法人日本パラスポーツ協会	藤原 正樹	常務理事
弁護士	三好 豊	(オンライン出席)
公認会計士	中村友理香	(オンライン出席)

○事務局

一般財団法人全日本ろうあ連盟
東京都

4 要旨

【挨拶】

○全日本ろうあ連盟 久松事務局長

- ・本日はお忙しいところ、第 14 回 2025 年デフリンピック大会に係る大会準備連携会議にご出席いただき、感謝申し上げます。
- ・今回は、対面で渡邊委員、小川委員、星委員、藤原委員が出席されている。三好委員、中村委員はオンライン出席となっている。
- ・私から一言、ご挨拶を申し上げます。
- ・デフリンピック 100 周年の記念すべき、そして我が国で初開催となった今大会は、予想を上回る大盛況であった。
- ・大会を成功裏に終えることができたのは、本会議の委員の皆様をはじめ、関係者の皆様のおかげである。改めて、この場をお借りして御礼申し上げます。
- ・大会前に開催した 11 月の第 13 回会議では、大会直前での開催ということで、大会の準備状況等について皆様にご確認をいただいた。
- ・本日は、大会終了後の報告事項について、順次ご説明をさせていただきます。
- ・皆様、本日も忌憚のないご意見をよろしくお願ひしたい。

【資料説明】

○DEAF SPORTS HOUSEの設置と実績について（全日本ろうあ連盟）

- ・子どもたちや市民、デフアスリートが、デフスポーツやデフリンピック、ろう者の文化への理解を深めるとともに、交流を通じて選手を応援できる場として、デフリンピックスクエア内に「DEAF SPORTS HOUSE」を設置した。
- ・来場者にはパンフレットやデフスポーツ応援漫画シール等を配布し、スタンプラリーの1か所となったこともあり、大会期間中の来場者数は大会期間の12日間で8,936名にのぼった。
- ・デフスポーツ・デフリンピック関連の展示では、デフリンピック100年の歴史や応援漫画、全国キャラバン活動をパネルや動画で紹介したほか、今大会及び2017年サムスン、2009年台北の過去大会のメダルを展示した。
- ・また、ろう者の文化体験として、ろう者2名のアーティストによる作品を展示したほか、応援メッセージボードや交流スペースを設置した。交流スペースでは競技中継の投影も行い、来場者や各国選手が交流しながら選手を応援できる機会を創出した。

○日本手話言語による解説について（全日本ろうあ連盟）

- ・東京2025デフリンピックに向けて、日本手話言語による解説のための解説者及び手話言語通訳者の養成を進めてきた。大会では、音声解説に対する国際手話通訳及び日本手話言語通訳の配置に加え、18競技の各決勝戦では手話言語による解説を実施することができた。
- ・全日本ろうあ連盟はスポーツ放送分野へきこえない当事者が参画することで、放送アクセシビリティ及びバリアフリーの仕組みを構築することを目的とし、手話言語アナウンサー・解説者・通訳者養成研修会を行った。
- ・2024年5月から8月に対面研修やスタジオ実習を含む47時間のカリキュラムを行い、修了者は49名となった。
- ・次に、2024年度の養成研修会修了者及びデフ競技団体等からの推薦者を対象に、解説におけるスキルの要点を再確認し、実践力の向上を図るために、「東京2025デフリンピックに向けた日本手話言語解説集中研修会」を開催した。
- ・2025年10月から11月に対面研修や履修を実施し、解説者23名、日本手話言語通訳者40名が修了した。
- ・そして大会本番ではこれら研修の成果として、18競技の決勝戦において、解説者22名、日本手話言語通訳者40名による解説が実現した。活動実績は、延べ55日間、延べ167名にのぼる。

○「ユニバーサルコミュニケーション技術の活用ガイド」（案）について（東京都）

- ・東京2025デフリンピックにおいては、手話通訳士の配置とともに、全ての競技会場において、音声を文字で表示する透明ディスプレイの設置や会場アナウンスのビジョン等への字幕表示など、ユニバーサルコミュニケーション（UC）技術を活用した競技観戦の

サポートを行った。また、デフリンピックスクエアでは様々なデジタル技術を体感できる「みる Tech」を開催した。

- この度、大会の準備や運営で得られた知見を、今後も様々な主体が各種イベントや街なかなどで活用する際に参照できるよう、「UC技術の活用ガイド」(案)として取りまとめたので、ご報告させていただく。
- 本ガイドの作成に当たっては、全日本ろうあ連盟、東京都聴覚障害者連盟にもご協力いただいた。感謝申し上げます。
- まず、「活用ガイド」の構成だが、大きく5つの項目となっている。このうち、前半の4までは、大会におけるUC技術の活用に関する内容であり、5では、今後の活用に向けて、大会で使用したUC技術の概要等をわかりやすくまとめている。
- 大会におけるUC技術の活用については、今後のスポーツ大会における情報保障の充実や、技術開発の促進及び普及等を目的として取組を行った。大会に向けた事前の取組として、競技会場での実地検証を行うとともに、スタートアップ企業等と連携して「音が見える、音を感じる」競技観戦の実施に向けた準備を行った。
- 競技会場におけるUC機器の活用については、総合受付等への透明ディスプレイの設置や、運営スタッフによるタブレットの活用、さらには、会場アナウンスの文字化等により、選手や来場者のコミュニケーションや競技観戦のサポートを行った。
- 大会では、きこえる、きこえないに関わらず、誰でも音を見たり、感じたりし、観戦をより楽しむことができるよう、一部の会場において「ミルオト」や「Hapbeat」、「スマートグラス」といった技術を活用した。
- デフリンピックスクエアにおいては、様々なデジタル技術を体感できる「みる Tech」を開催し、一般の来場者に加え、各国・地域の選手や関係者からも多くの来場をいただいた。
- 大会に向けた準備段階においては、当事者を含む有識者にも実地検証の場で機器を体験していただき、意見交換を行った。有識者からのアドバイスも踏まえて、UC技術活用に向けた課題を整理し、対応を行った。
- 大会期間中、各競技会場においてUC機器を利用した観客やスタッフへのアンケートを行った。それぞれの機器で表示される字幕表示が分かりやすかったかどうかを聞いたところ、多くの方から「とても分かりやすい」あるいは「分かりやすい」との回答があった。
- また、自由意見では「様々な活用場面が想定でき今後に期待する」など、UC技術を好意的に捉える意見があるとともに、「音声を文字に変換する精度を高める必要がある」など、今後の技術向上に期待する意見もあった。
- UC技術の活用に向けた留意点として、2点を挙げている。1点目は、現場において、できるだけ正確な字幕表示ができるよう事前準備や運用上の工夫が必要であるということ、2点目は、不特定多数の方が集まるイベント等においては、手話通訳士の配置を含め、事業の企画段階から地域の障害当事者に相談しながら、準備を進めることを推奨している。
- 大会で活用した透明ディスプレイなどの機器等については、今後、様々なイベント等で

活用する際の参考となるよう、その概要や活用にあたって工夫点などを紹介している。

- ・この活用ガイドは今後、様々な主体にも共有し、引き続き、UC技術の活用を図っていく。

○大会実績報告について（東京都）

- ・大会の概要を載せているが、参加国・地域、参加選手数は現在もICSDに確認中のため、12月時点の数値とさせていただいている。
- ・日本選手の活躍について、メダル獲得数は過去最高の51個となった。次ページでは各国選手団のメダル獲得総数のランキングを掲載しており、日本は第2位という素晴らしい結果だった。
- ・来場いただいた観客について、約28万人もの多くの方々に競技会場に来場いただき、サインエールを活用し会場が一体となって選手を応援できたことにより、コミュニケーションの壁を越え、共生社会への一步を踏むことができたと考えている。
- ・詳細の来場者数について、競技会場に約28万人、デフリンピックスクエアには約5万人の方々にご越しいただいた。
- ・競技別入場者数のランキング上位10競技を紹介している。陸上をはじめ、各競技にたくさんの方々にご越しいただけた。
- ・デフリンピックスクエアで実施した各種プログラムの紹介をしている。
- ・続いて、大会を支えていただいた方々のご紹介を掲載している。国際手話通訳者100人・日本手話言語通訳者141人の方々にご活躍いただき、ボランティアは2,959人の方に活動いただいた。
- ・大会サポートスタッフとしては、筑波技術大学の学生98人、協賛者の社員等608人の方々に参画いただいた。
- ・続いて、協賛いただいた主要な3社であるアシックス、トヨタ自動車、ソフトバンクにご支援いただいた内容をご紹介している。
- ・メディアについて、期間中たくさん取材をいただき、競技動画やSNSでは多くの方にご覧いただけた。
- ・最後に、東京都の取組事例として、ユニバーサルコミュニケーションとサインエールについて、大会時における実施内容の報告を記載している。こうした取組により、選手の活躍を後押しできたと考えている。

○大会報告書について（東京都スポーツ文化事業団）

- ・大会運営の軌跡を記録し、大会関係者へ報告するとともに、大会を通じて得た経験等をレガシーとして後世に継承していくことを目的に作成するものである。
- ・また、デフリンピック規約において作成が義務付けられており、完成した大会報告書については、国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）に提出を行う。
- ・作成に当たっては、全日本ろうあ連盟、東京都、東京都スポーツ文化事業団の3者で発行を行うものである。
- ・大会報告書の内容は資料に記載のとおりだが、「大会概要」からはじまり、「大会前の取

組」、「大会運営」、「大会スタッフ及びボランティア」、「財務」、「大会に向けた共生社会実現に資する取組」、最後に「レガシー」と全7章の構成となる。

- ・今後のスケジュールだが、3月の本会議で完成版を提出させていただく予定である。
- ・なお、先ほど「大会実績報告について」でご説明があった各種数値については、大会報告書には確定数値を掲載する予定である。現在、ICSDに確認・調整中であり、今回記載の数値から若干の相違がでることはご容赦いただきたい。

○大会収支の今後の対応について（東京都）

- ・デフリンピックの計画額については、令和5年12月に「東京2025デフリンピック大会規模（計画額）について」を取りまとめ、その後、令和6年12月に収入内訳を整理している。大会終了に伴い、現在、全日本ろうあ連盟、東京都、東京都スポーツ文化事業団の3者で経費を精査しているところで、今後、大会収支の見通しとして公表していきたいと考えている。

【意見交換】

○東京都 渡邊本部長

- ・日本での初開催、そして100周年の記念すべき大会を大盛況のうちに終えられたことを大変嬉しく思う。スポーツ庁やJOC、JPSSAにおかれては、大会の運営にもご協力いただき感謝申し上げます。
- ・大会全体で、当初の想定を上回る約33万人もの方々に足を運んでいただくことができたことは、大会前の様々な普及啓発活動や情報発信が効果を奏したものと思う。
- ・大会の運営面については、ICSDコーサ会長より準備・設営という部分でもハイレベルだったというコメントが出るほど充実したものになった。改めて連盟運営委員会と事業団デフ本部の皆様には感謝申し上げます。
- ・また、きこえない人ときこえる人が、協働し一体となって創り上げるという過去にない運営体制を取った今大会は、今後の大きな財産になる大会であったと思う。
- ・会場でサインエールによりきこえない人ときこえる人が一体となって応援する姿を目にすることができ、スポーツが社会を変える力というものを実感した。
- ・この後も大会報告書のとりまとめを引き続き進め、しっかりと知的資産として引き継いでいけるよう東京都としても取り組んでまいりたい。
- ・大会収支について、スポーツ大会は経費が増嵩するケースが多いが、コストを決める要因は主に3点あると考えており、1点目は国際団体との関係、2点目はプランニング、3点目は大会に携わる者のマインドであり、今回はこれら3点が上手くいったと考えている。
- ・1点目については、ICSD副会長に大杉先生が就任したほか、大会開催契約を結んだ段階で、全日本ろうあ連盟に牽引いただき、サービスレベルを日本側で決められるよう交渉を進めていただいた。
- ・2点目については、駒沢オリンピック公園総合運動場内でバレーボール、ハンドボール、陸上の複数競技を集約して実施したり、福島県・静岡県に協力いただいたりするなど、

関係者の皆様にご協力いただき、効率的なプランニングができたと思う。

- ・ 3点目のマインドについて感心したのは、競技会場でプレハブ等の仮設施設を建てることなく、既存の施設を運営諸室に活用するなどの工夫や、東京都から事業団へ出向した職員がルックのデザインを自ら制作するなど様々な計画も内製化して準備を進めたこと。経費を節約するというだけでなく、サービスなどかけるべきところにはかけるという職員の意識が効果を発揮したものと思う。
- ・ 最後に、本日公表予定の東京都で実施したデフリンピックの認知度調査の結果について報告させていただきたい。2021年の調査では10.4%、デフリンピックの日本開催が決定した年である2022年が10.9%、2023年が14.8%、去年は39.0%だったところ、大会後に実施した調査において、認知度が73.1%という結果となった。これまで様々な広報活動を東京都としても実施してきたが、最終的にこのような素晴らしい結果となり、都としても嬉しい限りである。

○スポーツ庁 小川参事官

- ・ 大会が大成功に終わり、スポーツ庁としても大変嬉しく思っている。
- ・ 大会が開催された11月中旬は、ちょうど政府において新内閣が発足した直後の慌ただしい時期ではあったが、総理大臣には開会式にご出席いただき、さらには文部科学省としても大臣、副大臣、政務官にも競技を視察していただけた。
- ・ また、大会後はメダリストが文部科学大臣のところにも報告に来てくださり、アスリートと意見交換をする本当に良い機会をいただけた。
- ・ 国としてもしっかりと大会運営と一緒に取り組むことができたと安心している。
- ・ 私自身も競技会場やデフリンピックスクエアを訪問させていただき、貴重な時間を過ごすことができた。
- ・ また、子供の競技観戦では、競技を見させていただいたが、当日観戦するだけではなく、学校の授業で事前学習を行い、デフスポーツとは何かをしっかりと学んだ上で競技観戦に行っており、しっかり学校教育との連携ができているという点が良かったと感じた。
- ・ 来月からミラノのオリンピック・パラリンピックが始まり、サッカーのワールドカップとワールドベースボールクラシック（WBC）もあり、さらに秋にはアジア競技大会があり、今後国際競技大会の開催が目白押しであるが、デフリンピックの成功を、日本で今年開催するアジア・アジアパラ競技大会等に繋げていきたいと思っている。引き続きよろしくお願ひしたい。

○公益財団法人日本オリンピック委員会 星常務理事

- ・ 大会は本当に大成功だったと思う。
- ・ 開閉会式といくつかの競技、デフリンピックスクエアに行かせていただいたが、バレーボールは会場に行ったところ満員で、来場者の多さを肌で感じた。
- ・ これなら競技観戦は有料でも良かったのではないかと思ったが、今回はより多くの方々に見ていただくことが主旨だったと思うので、もし次回開催することがあれば、認知度も上がり、デフスポーツの魅力も伝わったかと思うので、有料でも良いのではないかと

考えている。

- ・オリンピックもそうだが、アスリートの活躍がもたらす影響力の大きさを感じた。
- ・多くの方の来場がアスリートの背中を押したり、そのアスリートの活躍によって来場者がさらに増えたりという好循環があったように思う。
- ・テレビ等でも多く取り上げていただき、アスリートの存在、またその活躍ぶりが多くの国民の方に伝わったのが良かったと思う。
- ・先ほどUC技術についての説明があったが、デフリンピックがなければ、恐らく自分でこのような技術を積極的に調べることはなかったと思うので、知ることができて良かった。この先、耳が遠くなってもこうした技術を活用することができれば、年を取るのも怖くなくなるのではないかと感じた。
- ・両親も耳が遠くなってきて、普段は大きい声で喋らないといけませんが、UC技術も活用しながら、良いコミュニケーションができたらと思った。
- ・「スポーツの力を社会の力へ」ということで我々は取り組んでいるが、スポーツ大会の開催を通じて、スポーツが持つ発信力などによって、より多くの方にこうした技術が伝わり、社会で不便を感じている人の役に立つなど、様々な社会課題が解決されていくことは、デフリンピックを開催した意味の大きな一つになると思っている。
- ・また、すごく印象的だったのは、ボランティアの方々がとても笑顔で親切に対応してくださり、道案内などもスムーズに対応していただいたこと。このことも東京2020のレガシーなのではないかと感じている。ボランティアの方々の支えもあって、来場者も気持ちよく会場で過ごせたのではないかと感じている。

○公益財団法人日本オリンピック委員会

- ・最初はデフリンピック自体が認知度も低かったため、そんなに期待していなかった人もいたのではないかと感じるが、やはり大会が始まる前、大会期間中、それから大会が始まった後、こんなにすごい大会だったのかということが、関係者だけでなく様々な方に広く浸透したことと思う。
- ・デフリンピックスクエアを訪問して、来場者への優しさや、アスリートと一般来場者の交流というものを具現化した場所であると感じた。さらに協賛企業の展示もあり、こうした展示を通じて、多様な主体が支援していることを感じることもできたのではないかと感じる。
- ・本当に素晴らしい大会にしてくださり、我々としても大変嬉しく思っている。

○公益財団法人日本パラスポーツ協会 藤原常務理事

- ・大会は大成功だったと思う。
- ・JPSPAとしても、各会議の場でデフリンピックについて広報活動したり、水泳・陸上のスタートランプについて、国の補助事業だが我々経由で各地域の協会や競技団体に事業として進めさせていただいた。
- ・7つの競技会場とデフリンピックスクエアに行かせていただき、どこの会場も賑わっており大変嬉しかった。競技も面白かった。

- ・特にバレーボールは日本戦ではなかったものの満員となっており、日本の選手はもちろんだが、海外の選手も、これほどの観客に囲まれる経験は今までしたことはなかった、日本以外の国に対しても応援してもらえたと感銘していたので、国際交流という点でも素晴らしかったと感じている。
- ・年末年始に地元に戻った際、以前は誰もデフリンピックのことを知らなかったが、今回は自分が会話した相手は全員知っていた。東京はそうだが、地方でもデフリンピックの認知度が浸透していたという点でも、大会の開催意義があったと思う。
- ・今後の対応をどうしていくかは、話を進めていかなければいけないし、デフスポーツの競技団体は資金面やガバナンス上の課題があり、脆弱な体制となっているところも多いかと思う。今後のデフリンピック大会で今大会のレガシーをどのように活用していくか、海外での開催であっても日本から応援に来ていただけるように是非検討いただきたい。

○全日本ろうあ連盟

- ・12月に当連盟の理事会を開催し、今大会の振り返りを行った。
- ・大会のレガシーをどのように活かしていくか、デフスポーツ競技団体の体制をどのように強化していくかが今後の課題と考えている。
- ・大会の競技会場には約28万人の観客が来場し、競技動画配信をご覧になった方は11月27日時点で約320万人もいた。先ほど渡邊委員からお話があったように、デフリンピックの認知度が73.1%に向上したことを好機と捉え、デフスポーツ競技団体の体制強化に向けた基盤をしっかりと作るための検討を始めようと、改めて動いている。
- ・今後ともJOC、JPSPAの皆様方にもご指導いただきながら進めていきたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。

○三好弁護士

- ・デフリンピックがたくさんの注目と感心を集めて大成功に終わったことを嬉しく思っている。
- ・また、大きな混乱やトラブルも発生せず幕を閉じることができたことにも大変安心をしている。
- ・デフアスリートの皆様、大会の運営準備に携わってこられた関係者の皆様に対して、心から敬意を表したい。
- ・私自身もスポーツの持つ価値、共生社会の実現に向けたスポーツの貢献というものを改めて認識することができたので、これからスポーツ分野に対して精力的に取り組んでまいります。

○中村公認会計士

- ・大勢の観客の方が来場されたこと、また選手の方々が大変活躍されてたくさんの記録が更新されたこと、また大勢のボランティアの方々に参画いただいたということで、大会が大盛況に終わり、関係者の皆様方のご尽力に心から敬意を表したい。
- ・また大会期間中、大きな災害等もなく、無事に大会が終了したことにも安堵している。

- ・UC技術の活用が進んでおり、またその活用の促進に伴い、現場での社会実装が進み、今後ますます技術が発展していくことと思う。今後どのように発展していくか、大変興味を持っているので引き続き注視していきたい。
- ・大会収支について現在取りまとめをされているとのことだが、当初の予算立てされた数値と、大会後の実績値の比較は大変重要なことなので、きちんと進めていただければと思う。
- ・また、現物の提供品であったり、無償での役務提供といったものは、数値では表に現れないがコストの削減といった意味では重要な事項なため、そのような提供等があったことも記録にしっかり留めておくと、今後同様の大会があった時に役立つかと思うので、留意していただきたい。

【意見交換総括】

○全日本ろうあ連盟 久松事務局長

- ・皆様からのご意見に感謝申し上げます。
- ・只今いただいたご意見も踏まえ、大会を踏まえた今後の対応を着実に進めていく。

○事務局

- ・「日本手話言語による解説」、「大会実績報告」等について、皆様にご確認をいただくことができた。
- ・次回連携会議について、具体的な開催時期・開催方法については、改めて事務局から皆様にご連絡を差し上げる。

○全日本ろうあ連盟 久松事務局長

- ・本日皆様からいただいた貴重なご意見を参考に、引き続き大会を踏まえた今後の対応を着実に進めていく。本日はありがとうございました。これをもって、会議を終了させていただきます。